

【共同研究】

婚前カップルにおけるパートナーに対する期待内容の特徴 — クラスタ分析によるカップル間比較 —

吉川 延代* 今野 義孝**

Characteristics of expectations for partners in premarital couples: Comparison among couple-clusters

Nobuyo YOSHIKAWA, Yoshitaka KONNO

Open-ended descriptions obtained from a total of 226 males and females in 113 couples were classified into 19 categories: ① economic stability, ② maintaining relationships, ③ understanding, ④ support, ⑤ cooperation and understanding of child-rearing chores, ⑥ discussion, ⑦ a sense of peace, ⑧ confidence, ⑨ balancing work and household chores, ⑩ housework, ⑪ priority of home, ⑫ health, ⑬ children, ⑭ faithful, ⑮ love, tenderness, compassion, and thanks, ⑯ smiling, cheerfulness, and pleasantness, ⑰ mutual understanding, support, and cooperation, ⑱ mental stability, and ⑲ equal relationship. As a result of factor analysis with promax rotation using the principal factor method, six factors were identified: "peace," "stability," "mutual understanding," "healthy home," "maintaining love," and "equality of child-rearing chores." Comparisons of three clusters (Cluster 1: High agreement in Communication, Cluster 2: Disagreement in Communication and Sense of Relief, Cluster 3: High agreement in all sub-scales) revealed that the clusters and the factors were not significantly related. However, couples in Cluster 2 were characterized as having poor communication skills and conflict resolution skills and as being less satisfied with the couple's relationship. Thus, couples in Cluster 2 may have problems with attaining mutual understanding, support, and cooperation.

Key words: premarital couples, expectations of partners, comparison among couple-clusters

婚前カップル パートナーへの期待 カップルークラスタ間比較

はじめに

わが国の離婚件数は1991年から激増し続け、2002年には最高を記録した。離婚率（人口千人対）の国際比較をみると、アメリカが4.2（2002年）で最も高く、次いでイギリスが2.8（2003年）、

ドイツが2.3（2006年）、フランスが2.3（2006年）、スウェーデンが2.2（2006年）、そしてわが国が2.0（2007）となっている（国立社会保障・人口問題研究所，2006，2009）。このように、わが国の離婚率は欧米先進諸国のそれと肩を並べていることがわかる。

厚生労働省より発表された2009年人口動態統計の年間推計によると、2009年度の全国の離婚件数は25万3,000組であった。離婚件数は、2002年度の28万9,836組がピークで、以後年々

* よしかわ のぶよ 文教大学人間科学部非常勤講師

** こんの よしたか 文教大学人間科学部臨床心理学科

減少していたが、2009年度は、2008年度より約2,000件増加していた。司法統計(2008)によると、調停離婚の原因の第一位は「性格の不一致」であり、男性が62%、女性が44%を占めている。第二位は男性が「異性関係」(18%)、女性が「暴力」(29%)、第三位は、男性が「家族・親族との仲が悪い」(16%)、女性が「異性関係」(26%)となっている。また、2007年のわが国の離婚件数を同居期間別の構成割合でみると、5年未満(34.0%)が最も多く、次いで5~9年(22.1%)である(国立社会保障・人口問題研究所, 2009)。つまり、全体の約3分の1以上の離婚が結婚5年以内に、そして過半数の離婚が結婚10年未満の比較的早い時期に起こっていることになる。

結婚後の夫婦の不和や離別の原因は、二人の関係の非常に早い時期に存在することが指摘されている(Larsen & Olson, 1989)。その原因を早期に発見し、結婚後の不和や別離を防止するためには、プリマリタル・カウンセリングを始めとする結婚準備教育プログラム(プリマリタル・プログラム)の必要性が指摘されている(Silliman & Schuman, 2000)。

プリマリタル・プログラムにおいては、カップルの関係を査定するためのアセスメント・ツールが不可欠である。結婚前に、不和や離別などの危険性のあるハイリスク・カップルを識別することができれば、彼らに対して有効な介入を行うことが可能になる。それ故、ハイリスク・カップルを識別するためのプリマリタル・アセスメント尺度の開発が求められる(Fowers & Olson, 1986)。そして、アメリカにおいてはPREPARE(Olson, 1996)をはじめとして、様々なアセスメントが開発されてきた。しかし、わが国独自のプリマリタル・アセスメント尺度はほとんど開発されていない。

そこで吉川(2008)は、結婚レディネス査定尺度(以下パートナーズ・テスト)の開発を試みた。パートナーズ・テストは、「パートナーズ」、「性格テスト」、「FACESⅢ改訂版」から構成されている。「パートナーズ」は、6つの下位尺度(「話し合い」、「性格傾向」、「性役割」、「安らぎ感」、「支配欲求」、「金銭感覚」)30項目である。「性格

テスト」は、4つの下位尺度(「外向性」、「神経症傾向」、「誠実性」、「調和性」)21項目である。「FACESⅢ改訂版」は、2つの下位尺度(「凝集性」、「適応性」)9項目である。180組のカップルを対象にパートナーズ・テストの12の下位尺度得点のカップル間一致度得点を用いて、K-meansクラスタ分析を行った結果、3つのクラスタに分かれた。クラスタ1は「話し合い」高得点一致型、クラスタ2は「話し合い」、「安らぎ感」不一致型、クラスタ3は「全般的高得点一致型」である。そしてクラスタ2は、フォローアップ調査におけるパートナーとの関係の満足度が低いこと、コミュニケーションや葛藤解決のスキルが乏しいこと、自己理解が不十分なことが明らかになった。このことから、クラスタ2のカップルには、これらのスキルの改善を図るためのプリマリタル・カウンセリングの必要性が示唆された。また、重回帰分析の結果、パートナーとの「現在の関係の満足度」に対しては、「話し合い」、「安らぎ感」、「外向性」、それに「凝集性」が有意に関係していることが明らかになった。

そこで、パートナーズ・テストを行ったカップルの相手への期待に関する自由記述の分析から、クラスタ2の特徴と、他のクラスタの特徴とを比較検討することによって、最もハイリスクであると考えられるクラスタ2のカップルの特徴をより具体的に明らかにすることを本研究の目的とする。

方法

1. 結婚レディネス査定尺度(パートナーズ・テスト)の構成

パートナーズ・テストは、①フェイスシート24項目(最終学歴、職業、年収、結婚に対する両親の反応、結婚に対する友人の反応、パートナーの長所と短所についての理解、自分の長所と短所についての理解、パートナーへ期待すること)、②「パートナーズ」30項目(「話し合い」、「性格傾向」、「性役割」、「安らぎ感」、「支配欲求」、「金銭感覚」)、③「性格テスト」21項目(「外向性」、「神経症傾向」、「調和性」、「誠実性」)、④「FACES

Ⅲ改訂版」9項目（「凝集性」、「適応性」）の合計84項目から構成されている。

2. 対象者

2004年6月から2006年7月までの間にインターネットのホームページなどを通じてパートナーズ・テストに応募したカップルの180組のうち、相手への期待に関する自由記述を少なくともどちらかが行った男女113組226名である。180組のカップルの平均年齢は、男性が27.5歳（18～55歳）、女性が26.5歳（18～47歳）であった。また、カップル間平均年齢は、27歳（SD=6.770、範囲=18～51歳）であった。パートナーと知り合ってから期間の平均は、3年2ヶ月であった。

3. 実施方法

カップルには、男女別々にパートナーズ・テストに記入してもらい、二人の回答をまとめて1つの返信用封筒に入れて郵送で返信してもらった。全てのカップルには、結果のフィードバックを郵送またはEメールで行った。カウンセリングを希望するカップルには、B大学の相談室にてカウンセリングを行った。

結果

1. 下位尺度の一致度によるクラスタ分析の方法

クラスタ分析に当たっては、男女の各下位尺度の得点を平均50、1標準偏差を10とするZ得点（偏差値得点 $Z=10z+50$ ）に変換して、下位尺度間の指標の標準化を図った。Z得点に基づいて、各下位尺度の得点を高得点領域（H）（60以上）、中間得点領域（M）（40以上60未満）、低得点領域（L）（40未満）に分け、個々のカップルにおける下位尺度の一致度パターンを次の6種類に分類した。①HH：男女とも高得点領域にある、②HMまたはMH：男性（または女性）が高得点領域で、女性（または男性）が中間得点領域にある、③MM：男女とも中間得点領域にある、④HLまたはLH：男性（または女性）が高得点領域で、女性（または男性）が低得点領域にある、⑤MLまたはLM：男性（または女性）が中間得点領域で、

女性（または男性）が低得点領域にある、⑥LL：男女とも低得点領域にある。

これらHHからLLまでの6つのパターンは、カップルの得点の組み合わせが、高得点領域で一致から低得点領域で一致の順序に並んでいる。そこで、これら6つのパターンの間に順序尺度を適用し、HH=1、HM(MH)=2、MM=3、HL(LH)=4、ML(LM)=5、LL=6とした。そして、12の下位尺度の一致度パターン得点を用いて、180組のカップルに対してK-meansによるクラスタ分析を行った。その結果、3つのクラスタが得られた。

クラスタ1（N=64組、全分析対象の36%）は、「話し合い」は高得点一致であるが、その他の下位尺度が不一致傾向にある“「話し合い」高得点一致型”である。クラスタ2（N=44組、全分析対象の24%）は、「話し合い」と「安らぎ感」が不一致傾向を示している“「話し合い」・「安らぎ感」不一致型”である。クラスタ3（N=72組、全分析対象の40%）は、全ての下位尺度が高得点一致傾向を示している“全般的高得点一致型”である。

2. 「パートナーへ期待すること」に関する自由記述の因子分析

カップル男女113組226名の「パートナーへ期待すること」についての自由記述を内容別に整理した結果、無記入を除くと以下のような20のカテゴリーに分けることができた。

- ①経済的安定；「働いて欲しい」、「仕事で成功して欲しい」、「仕事を頑張っていて欲しい」など、経済的な安定を望むもの。
- ②関係維持；「いつまでも変わらずにいて欲しい」、「今の関係を続けたい」、「ずっと愛して欲しい」など、現在の関係の維持を望むもの。
- ③理解；「私の事を理解して欲しい」、「自分の仕事を理解して欲しい」、「分かって欲しい」など、相手からの理解を望むもの。
- ④サポート；「支えて欲しい」、「心のよりどころになって欲しい」、「自分への応援」など、相手からのサポートを望むもの。
- ⑤子育て・家事への協力や理解；「子育てや家事を手伝って欲しい」、「家事を分担して欲しい」など、子育てや家事への相手からの協力を望むもの。

- むもの。
- ⑥話し合い;「何でも相談し合いたい」、「話し合っ
て解決したい」、「意見を出し合う」など、相
互の話し合いやコミュニケーションを望むも
の。
- ⑦安らぎ感;「幸福感」、「癒し」、「安心感」、「穏
やかさ」など、安らぎ感を望むもの。
- ⑧信頼感;「正直であること」、「嘘をつかない」、「誠
実」など、相手に対する信頼感を望むもの。
- ⑨仕事と家事の両立;お互いに仕事をもつときに、
相手に対して仕事と家事の両立を望むもの。
- ⑩家事;「家事をしっかりと欲しい」、「料理が
上手になって欲しい」など、主体的な家事や
料理を望むもの。
- ⑪家庭優先;「家庭を守って欲しい」、「家族を大
切にして欲しい」、「アットホーム」など、家
庭や家族の優先を望むもの。
- ⑫健康;相手の健康を望むもの。
- ⑬子ども;「子どもをもつこと」、「子どもを大切
にして欲しい」、「いい父親(母親)になって
欲しい」など、主体的な子育てを望むもの。
- ⑭浮気をしない;相手に対して浮気をしないこと
を望むもの。
- ⑮愛情・優しさ・思いやり・感謝;「優しさと愛
情」、「相手への思いやり」など、相手に愛情、
優しさ、思いやり、感謝を望むもの。
- ⑯笑顔・明るさ・楽しさ;「笑顔の絶えない家庭」、
「明るくいて欲しい」、「楽しい家庭」など、
相手の笑顔や明るさ、結婚生活の楽しさを望
むもの。
- ⑰相互理解・相互協力・支え合い・分かち合い;
お互いに理解し助け合いたいという、相互理

Table 1. 自由記述19項目の因子分析結果

	成分					
	1	2	3	4	5	6
7. 安らぎ	.741	-.120	-.065	.051	-.143	-.174
18. 精神的安定	.539	.258	-.037	-.118	-.130	.073
13. 子ども	-.424	.004	-.063	-.162	-.108	-.332
1. 経済的安定	.253	.618	.063	.088	-.007	.029
3. 理解	-.141	.562	-.016	-.182	-.076	-.040
4. サポート	-.049	.499	.142	.006	-.161	.033
6. 話し合い	-.263	.084	.652	.127	.055	-.174
10. 家事	-.187	-.235	-.572	.144	-.203	-.078
17. 相互協力	-.148	-.323	.476	-.025	-.076	.111
14. 浮気	-.164	-.075	-.380	.000	.235	-.126
12. 健康	.168	-.194	-.089	.766	-.069	.160
8. 信頼	-.026	.054	.371	.630	.040	-.132
11. 家庭優先	-.224	.127	-.230	.495	-.021	-.052
15. 愛情・思いやり	-.059	-.132	.102	-.030	.672	-.067
2. 関係維持	-.174	-.144	.011	-.065	.563	.282
16. 笑顔・楽しさ	.405	-.130	-.050	-.036	.444	-.245
9. 仕事と家事の両立	.098	-.307	.203	-.107	-.433	-.067
19. 平等	.002	-.145	.025	-.042	.037	.739
5. 子育て・家事への協力・理解	-.079	.206	-.021	.071	.019	.603

成分相関行列

成分	1	2	3	4	5	6
1. 安らぎ	1.000	-.015	.016	-.093	.071	.013
2. 安定	-.015	1.000	-.096	.075	-.035	.048
3. 相互理解	.016	-.096	1.000	.025	.006	.062
4. 健康な家庭	-.093	.075	.025	1.000	.032	.020
5. 愛情の維持	.071	-.035	.006	.032	1.000	-.045
6. 子育て・家事への平等性	.013	.048	.062	.020	-.045	1.000

解・相互協力・支え合い・分かち合いを望むもの。

⑱精神的安定；相手に対して精神的に安定していることを望むもの。

⑲平等な関係；二人の関係が平等であることを望むもの。

⑳その他；以上のどれにも当てはまらないもの。

以上の20のカテゴリーのうち、⑳その他を除く19のカテゴリーを「記述あり」、「記述なし」の2件法で評定し、主因子法を用いてプロマックス回転による因子分析を行った。その結果、Table1に示すように6個の因子が抽出された。因子負荷量±0.45以上の項目に基づいて各因子を解釈した結果、以下の通りになった。第1因子は⑦安らぎ感、⑱精神的安定のカテゴリーからなる「安らぎ」($\alpha = .562$)である。第2因子は①経済的安定、③理解、④サポートのカテゴリーからなる「安定」($\alpha = .563$)である。第3因子は、⑥話し合い、⑩家事、⑰相互理解・相互協力・支え合い・分かち合いのカテゴリーからなる「相互理解」($\alpha = .574$)である。第4因子は⑫健康、⑧信頼感、⑪家庭優先のカテゴリーからなる「健康な家庭」($\alpha = .582$)である。第5因子は⑮愛情・優しさ・思いやり・感謝、②関係維持、⑩笑顔・明るさ・楽しさのカテゴリーからなる「愛情の維持」($\alpha = .567$)である。第6因子は、⑲平等な関係、⑤子育て・家事への協力や理解のカテゴリーからなる「子育て・家事への平等性」($\alpha = .486$)である。

3. 因子ごとのクラスタ間比較

カップル男女113組226名を対象に因子分析から得られた「安らぎ」、「安定」、「相互理解」、「健康な家庭」、「愛情の維持」、「子育て・家事への平等性」の6つの因子のそれぞれにおいてクラスタ間の比較を行った。各クラスタは、クラスタ1(“話し合い高得点一致型”)が52名、クラスタ2(“話し合い”・「安らぎ感」不一致型)が86名、クラスタ3(“全般的が高得点一致型”)が88名である。

①第1因子「安らぎ」について記述している者は、クラスタ1が4名(7.7%)、クラスタ2が14名(16.3%)、クラスタ3が11名(12.5%)であっ

た。 χ^2 検定の結果、クラスタと「安らぎ」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 2.150, df = 2, n.s.$)。

②第2因子「安定」について記述している者は、クラスタ1が9名(17.3%)、クラスタ2が20名(23.3%)、クラスタ3が18名(20.5%)であった。 χ^2 検定の結果、クラスタと「安定」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 0.706, df = 2, n.s.$)。

③第3因子「相互理解」について記述している者は、クラスタ1が15名(28.8%)、クラスタ2が29名(33.7%)、クラスタ3が28名(31.8%)であった。 χ^2 検定の結果、クラスタと「相互理解」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 0.354, df = 2, n.s.$)。

④第4因子「健康な家庭」について記述している者は、クラスタ1が13名(25.0%)、クラスタ2が11名(12.8%)、クラスタ3が19名(21.6%)であった。 χ^2 検定の結果、クラスタと「健康な家庭」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 3.751, df = 2, n.s.$)。

⑤第5因子「愛情の維持」について記述している者は、クラスタ1が12名(23.1%)、クラスタ2が20名(23.3%)、クラスタ3が27名(30.7%)であった。 χ^2 検定の結果、クラスタと「愛情の維持」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 1.565, df = 2, n.s.$)。

⑥第6因子「子育て・家事への平等性」について記述している者は、クラスタ1が4名(7.7%)、クラスタ2が9名(10.5%)、クラスタ3が5名(5.7%)であった。 χ^2 検定の結果、クラスタと「子育て・家事への平等性」因子のとの間には有意な関係は見られなかった($\chi^2 = 1.364, df = 2, n.s.$)。

以上のように、クラスタと6つの因子の間には有意な関係は見られなかった。また、どのクラスタも、第3因子「相互理解」について記述する者の割合が最も高かった。

4. 6つの因子における男女間比較

クラスタと6つの因子の間には有意な関係が見られなかった。そこで、次にクラスタに関係なく、6つの因子における男女間の比較を行った。対象

は男女各113名である。

①第1因子「安らぎ」について記述している者は、男性15名(13.3%)、女性14名(12.4%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「安らぎ」因子との間には有意な関係は見られなかった($\chi^2=0.039, df=1, n.s.$)。

②第2因子「安定」について記述している者は、男性14名(12.4%)、女性33名(29.2%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「安定」因子との間には有意な関係が見られた($\chi^2=9.698, df=1, p<.01$)。

③第3因子「相互理解」について記述している者は、男性36名(31.9%)、女性36名(31.9%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「相互理解」因子との間には有意な関係は見られなかった($\chi^2=0.000, df=1, n.s.$)。

④第4因子「健康な家庭」について記述している者は、男性(13.3%)15名、女性28名(24.8%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「健康な家庭」因子との間には有意な関係が見られた($\chi^2=4.854, df=1, p<.05$)。

⑤第5因子「愛情の維持」について記述している者は、男性23名(20.4%)、女性36名(31.9%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「愛情の維持」因子との間には有意な関係が見られた($\chi^2=3.876, df=1, p<.05$)。

⑥第6因子「子育て・家事への平等性」について記述している者は、男性1名(0.9%)、女性17名(15.0%)であった。 χ^2 検定の結果、性と「子育て・家事への平等性」因子との間には有意な関係が見られた($\chi^2=15.453, df=1, p<.01$)。

以上のように、クラスタとは関係なく、第2因子「安定」、第4因子「健康な家庭」、第5因子「愛情の維持」、第6因子「子育て・家事への平等性」に関して、女性の方が男性よりも記述している割合が有意に高かった。また、男女とも第3因子「相互理解」について記述している割合が最も高かった。つまり、女性はどのクラスタにおいても「安定」や「健康な家庭」や「愛情の維持」を男性より多く望んでおり、特に「子育て・家事の平等性」については女性の側に特有の期待ともいえる。

考察

本研究は、吉川(2008)が作成した結婚レディネス査定尺度であるパートナーズ・テストの自由記述におけるパートナーへの期待について分析したものである。パートナーズ・テストをカップル男女113組226名に施行し、12の下位尺度得点のカップル間一致度得点を用いて、K-meansクラスタ分析を行った結果をもとに3つのクラスタに分類し、クラスタと自由記述の内容についての比較検討と男女別の比較検討を行った。3つのクラスタとは、クラスタ1が“話し合い高得点一致型”で52名(26組)、クラスタ2が“話し合い・「安らぎ感」不一致型”で86名(43組)、クラスタ3が“全般的高得点一致型”で88名(44組)である。

カップル男女113組226名の「パートナーへ期待すること」についての自由記述を内容別に整理した結果、無記入を除いて、①経済的安定、②関係維持、③理解、④サポート、⑤子育て・家事への協力や理解、⑥話し合い、⑦安らぎ感、⑧信頼感、⑨仕事と家事の両立、⑩家事、⑪家庭優先、⑫健康、⑬子ども、⑭浮気をしない、⑮愛情・優しさ・思いやり・感謝、⑯笑顔・明るさ・楽しさ、⑰相互理解・相互協力・支え合い・分かち合い、⑱精神的安定、⑲平等な関係、⑳その他、の20のカテゴリーに分けることができた。20のカテゴリーのうち、㉑その他を除く19のカテゴリーについて主因子法を用いてプロマックス回転による因子分析を行った結果、6個の因子が抽出された。すなわち、第1因子は⑦安らぎ感、⑱精神的安定のカテゴリーからなる「安らぎ」である。第2因子は①経済的安定、③理解、④サポートのカテゴリーからなる「安定」である。第3因子は、⑥話し合い、⑩家事、⑰相互理解・相互協力・支え合い・分かち合いのカテゴリーからなる「相互理解」である。第4因子は⑫健康、⑧信頼感、⑪家庭優先のカテゴリーからなる「健康な家庭」である。第5因子は⑮愛情・優しさ・思いやり・感謝、②関係維持、⑯笑顔・明るさ・楽しさのカテゴリーからなる「愛情の維持」である。第6因子は、⑲平等な関係、⑤子育て・家事への協力や理解のカテ

ゴリーからなる「子育て・家事への平等性」である。なお、 α 係数は.486から.582と低かったが、これは本研究で用いたデータが[1,0]の値によることや、各因子に含まれる項目数が少ないことによるものであると考えられる。

ところで、“「話し合い」・「安らぎ感」不一致型”のクラスタ2のカップルは、クラスタ1 (“「話し合い」高得点一致型”)、クラスタ3 (“全般的高得点一致型”)に比べて、パートナーとの関係の満足度が低いこと、コミュニケーションや葛藤解決のスキルが乏しいこと、カップル間の相互理解が不十分なことから「葛藤的なカップル」であることが示唆されている(吉川, 2008)。しかし、今回、「パートナーへ期待すること」についての自由記述の内容に関する因子分析から得られた「安らぎ」、「安定」、「相互理解」、「健康な家庭」、「愛情の維持」、「子育て・家事への平等性」の6つの因子におけるクラスタ間の比較を行った結果、クラスタと6つの因子の間には有意な関係は見られなかった。パートナーへの期待については、クラスタ2のカップルも他のクラスタのカップルと違いはなかった。しかし、その期待に対する実現の仕方に問題があると考えられる。例えば、第3因子「相互理解」について記述する者の割合はどのクラスタでも最も高く、お互いに理解し合いたいという期待にはクラスタ間の違いは見られなかった。ただし、クラスタ2のカップルは、コミュニケーションスキルや葛藤解決スキルが乏しく、実際にはカップル間の関係の満足度が低いという結果(吉川, 2008)が得られている。このことから、クラスタ2のカップルは、他のクラスタのカップルと同じように「相互理解」を望んでいるが、「相互理解」の実現の仕方に問題があるものと推測される。

上述のように、クラスタと6つの因子との間には有意な関係は見られなかった。一方、男女別に6つの因子との関係を見てみると、第2因子「安定」、第4因子「健康な家庭」、第5因子「愛情の維持」、第6因子「子育て・家事への平等性」に関して、女性の方が男性よりも記述している者の割合が有意に高かった。第2因子「安定」とは、経済的な安定や、相手からの理解やサポートを望

む項目を含む。第4因子「健康な家庭」とは、相手の健康や、相手に対する信頼感、家庭や家族の優先を望む項目を含む。第5因子「愛情の維持」とは、相手に愛情、優しさ、思いやり、感謝を望むことや、現在の関係の維持、相手の笑顔や明るさ、結婚生活の楽しさなどを望む項目を含む。第6因子「子育て・家事への平等性」とは、二人の関係が平等であることや子育てや家事への相手からの協力を望む項目を含む。これらのことから、多くの女性はパートナーに、経済的な安定やサポートを期待し、健康で信頼できる人であり、家庭を大切に、いつまでも変わらずに愛してくれることを期待し、子育てや家事と一緒にしてくれることを期待していると考えられる。これはクラスタに関係なく、女性全般にいえることである。つまり、男性よりも女性の方が結婚に際して、パートナーに対して具体的に期待する事柄が多いということになろう。

男女とも第3因子「相互理解」について記述している割合が、31.9%と同率で最も高かった。「相互理解」とは、相互の話し合いやコミュニケーションを望み、どちらか一方の主体的な関与を望むのではなく、相互理解・相互協力・支え合い・分かち合いを望む項目を含む。クラスタにも男女にも関係なく、パートナーとの関係として最も期待される理想的な関係と言えるのかもしれない。ただし、その希望を具体的に実現するためのカップルの相互作用のあり方がクラスタ間で異なっているものと考えられる。

Larson & Holman(1994)は、結婚の質と安定性を予測する要因として、カップルの背景要因、個人の特性要因、カップルの相互作用の要因の3つのエコロジカルな要因にまとめており、特に個人の特性とカップルの相互作用の要因が重要であることを示唆している。Markman(1979, 1981, 1984)は、26組のカップルに対して婚約期間から5年半にわたる追跡調査を行った。その結果、結婚後、行き詰ってしまうカップルの特徴は、コミュニケーションが不足していることを見いだしている。そして、カップルの離別を最も予測する要因は、結婚に対するカップルの確信の低さと、話し合いにおけるギブ・アンド・テイクの関係の弱さ

であることを指摘している。また、Markman & Hahlweg(1993)は、カップルに対してコミュニケーションの改善を図り、問題が大きくなる前に葛藤を処理することを指導することによって、別離や離婚のリスクを予防することができると述べている。彼らは、この指導によって、特に、「自己評価」、「積極的な解決」、「パートナーの受容」の評価点が上昇し、「意見の相違」の評価点が低下することを実証している。このように、コミュニケーションや葛藤解決が結婚の質と安定性にとって非常に重要な要因であることが指摘されている。

つまり、多くのカップルが望む「相互理解」には、コミュニケーションや葛藤解決のスキルが欠かせないものとなる。そして、カップルの相互作用の過程がうまくいくことが今後の結婚生活の質と安定性を維持するために不可欠になると考えられる。「相互理解」の期待がうまく叶えられるためには、特にクラスタ2のカップルには、コミュニケーションや葛藤解決スキルの向上を目指したプライマリタル・カウンセリングが必要であると考えられる。

引用文献

Fowers, B.J., & Olson, D.H. (1986). Predicting marital success with PREPARE: A predictive validity study. *Journal of Marital and Family Therapy*, 12, 403-413.

国立社会保障・人口問題研究所 (2006). 人口統計資料集.

国立社会保障・人口問題研究所 (2009). 人口統計資料集.

Larsen, A.S., & Olson, D.H. (1989). Predicting marital satisfaction using PREPARE: A replication study. *Journal of Marital and Family Therapy*, 15, 311-322.

Larson, J.H., & Holman, T.B. (1994). Premarital predictors of marital quality and stability. *Family Relationship*, 43, 228-237.

Markman, H.J. (1979). The application of a behavior model of marriage in predicting

relationship satisfaction of couples planning marriage. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 743-749.

Markman, H. J. (1981). Prediction of marital distress: A 5-year follow up. *Journal of Consulting and Clinical psychology*, 49, 760-762.

Markman, H. J. (1984). The longitudinal study of couples' interactions: Implications for understanding and predicting the development of marital distress. In K. Hahlweg & N. S. Jacobson (Eds.), *Marital interaction: Analysis and modification*. New York: Guilford. pp.253-284.

Markman, H. J., & Hahlweg, K. (1993). The prediction and prevention of marital distress: An international perspective. *Clinical Psychology Review*, 13, 29-43.

Olson, D.H., Fournier, D. G., & Druckman, J.H. (1986). *Counselor's manual for PREPARE-ENRICH* (rev. ed.). Minneapolis, MN: PREPARE-ENRICH Inc.

Olson, D.H. (1996). *PREPARE/ENRICH Counselors Manual*. Minneapolis, MN: Life Innovations.

司法統計年報 (2008). 家事編. 最高裁判所事務総局.

Silliman, B., & Schumm, W. R. (2000). Marriage preparation programs: A literature review. *The Family Journal*, 8, 133-142.

吉川延代 (2008). プリマリタル・カウンセリングのための結婚レディネス査定に関する基礎的研究. *家族心理学研究*, 22, 1-13.